

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	衣笠 弥生
論文題目	宝塚少女歌劇団・第一回欧州公演（一九三八年）をめぐって——日本演劇の海外進出とイタリアにおける受容を中心に——		
(論文内容の要旨)			
本論文は、1938年に敢行された宝塚歌劇団の欧州公演、とりわけイタリア公演（12月3日～12月16日、フィウメ、ヴェネツィア、ボローニャ、ジェノバ、トリノ、ミラノ3回、フィレンツェ、ローマ2回、ナポリの各都市、合計13回）をめぐって、その実現にいたる経緯、イタリアにおける反響、文化外交史における意義等といったテーマに、日本とイタリアにおける一次資料を丹念に読み込むことで実証的かつ解釈学的に迫ろうとするものである。本論文は序と結論にはさまれて、第Ⅰ部「欧州公演以前」、第Ⅱ部「欧州公演前夜」、第Ⅲ部「欧州公演以後」の3部から構成される。 「海外で演じた日本人（1）」と「海外で演じた日本人（2）」の2章からなる第Ⅰ部ではまず、第二次世界大戦以前に海を渡った劇団や芸能に光を当て、それらをめぐる当時の時代背景のなかから、宝塚初の海外公演が戦時下の実現されていく経緯を明らかにする。川上音二郎一座をはじめとする海外進出の各劇団や、市川左團次のモスクワ公演等についてはこれまでも論じられてきたが、本研究が改めて特に注目するのは、これら公演の評判や反省点を、小林一三を筆頭に宝塚側がきわめて周到に検討して踏まえたうえで、歌舞伎や舞踊をいかに「アレンジ」すべきかが議論されていたという点である。とりわけ着目されるのは、ブロードウェイの興行師レイ・カムストックからの助言、すなわち、「日本風」の舞踊や芝居を「ヨーロッパ風」の構成で見せるという手法が、小林一三の新しい「国民劇創成」の理想とも合致していた点である。 つづいて、「日本の「文化外交」とイタリアへのまなざし」と「第二次世界大戦前の日伊交流」の2章からなる第Ⅱ部では、主に官民双方による外交や文化交流の観点から、宝塚のイタリア公演へといたる背景が浮き彫りにされていく。ここでは特に以下の3点が明らかにされる。まず、日本文化の海外紹介を目指して1934年に設立された「国際文化振興会（KBS）」において、声楽家のベルトラメリ能子や、美術史家で実業家・政治家でもある團伊能ら識者をメンバーとする対イタリア「外交文化工作会議」が組織され、「予算不足」と「中心の不在」のなかでいかなる日本文化の紹介が可能かについて積極的に議論されていた点。次に、モスクワ公演を終えた市川左團次がみずから希望してミラノとローマにわざわざ足を運び（1928年9月）、イタリア文化と日本文化の類似性について講演したり、ムッソリーニに面会して敬意を表していたことなどがプラスに作用した点。最後に、その左團次が主役を演じた小山内薫の戯曲『ムッソリーニ』（1928年）に代表されるように、戦争へと突き進む当時の日本でいわば「ムッソリーニ・ブーム」が沸き起こっていた点、			

である。

さらに、宝塚派遣と同じ1938年にイタリアから来日した経済使節団が一か月強にわたって各地を訪問し、その模様はイタリア側によってニュース映画として撮られたが（8～10分のものが4本伝わる）、そこには産業や軍事、社寺仏閣や景勝地のみならず、日本の伝統芸能やスポーツや祭り等も短く紹介されていて、これらの映像がイタリアの大衆に最新の日本のイメージを広めることに貢献したという分析がなされているが、これは、先行研究では指摘されてこなかったものである。

最後に、これまでの議論を踏まえて、宝塚歌劇団のイタリア公演に踏み込む第Ⅲ部は、「宝塚少女歌劇団とイタリア」、「演劇をめぐるファシズム期イタリアの文化政策」、「ミラノ公演評とレナート・シモーネ」の3章からなる。ここでは、30名の団員と18名のスタッフからなる歌劇団の演目、旅程、上演形態、各地での評判等が、当時のイタリアの新聞やプログラムや演劇雑誌、残された映像の断片、さらに日本での報道や当事者の回想録等の一次資料の綿密な解読と分析によって明らかにされていく。とりわけ、大衆の同意と統率を図るファシスト政府による積極的な文化政策、具体的には、余暇厚生事業を促進する「仕事の後」という意味の「ドーポラヴォーロ」や、その一環として、民衆のあいだに演劇を広める運動「演劇振興会（filodrammatica）」が、宝塚公演にとってプラスに働き、好意的に迎えられた点が指摘される。さらに、この公演を機に、一般の読者にもわかるかたちで、新聞等で日本の演劇史が紹介された点にも注目している。

そして結論として、西洋の観客を意識したこうした折衷的な上演が、演劇と音楽と舞踊を組み込んだ宝塚の「国民劇」の構想に一定の役割を果たしたことが指摘される。なお本論文には、イタリアの新聞記事等の原文と翻訳が付録資料として添えられているが、これらは日伊文化交流史としても大きな価値を有するものである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、1938年12月におこなわれた宝塚歌劇団のイタリア公演（9都市において全13回）をめぐって、それが実現されるにいたった外交・政治的経緯、イタリアでの上演と評判等に関して、一次資料を駆使することで丹念な歴史的再構築を試みるものである。同歌劇団のドイツ公演については、これまでに幾つかの先行研究が存在するが、イタリア公演について包括的に論じたものは、本論文が最初であるといっても過言ではない。目下のところ、日本はもちろん、イタリアや英語圏でも類似の研究はない。

「欧州公演以前」、「欧州公演前夜」、「欧州公演以後」と題された3部で構成される本論文の独自性は、次の2点に要約される。1. とりわけ当時のイタリア側の一次資料、具体的には、新聞や雑誌の記事や残されたドキュメンタリー・フィルム（の断片）等を丹念に発掘・収集し、綿密な解説を踏まえたうえで議論を組み立てている点。2. 戦時下の日本の文化外交のみならず、ファシズムの文化政策との密接な関係性のなかで、宝塚のイタリア公演をとらえなおそうと試みている点、である。以下にそれぞれについて説明を加える。

1. 本論文が発掘したイタリア側の一次資料として、もっとも注目に値するのは、レナート・シモーネという演劇批評家によって著わされ、イタリアを代表する新聞「コリエレ・デッラ・セーラ」（1938年11月27日付け）に発表された比較的長い記事「タカラヅカ芸術親善使節団の巡演、間もなく始まる」である。12月の公演をまじかに控えたこの記事では、それまで西洋に流布していた紋切型のイメージ、「ゲイシャ」や「ハラキリ」に代わって、日本の伝統的な演劇の歴史が簡潔でかつ的確にたどられ、「かつてオクニという女性によって創始されたカブキ」が、その後男性のみの演劇へと変わるが、タカラヅカによってふたたび女性のもとに戻ってくる、といった趣旨の指摘がなされている。本論文は、このような良心的な紹介記事がイタリア側の歓迎に大きく貢献したことを初めて明らかにしている。歌と舞と伎の多様な混交は、日本的なものと西洋的なものとを融合をむしろ可能とし、宝塚の創始者、小林一三による新たな「国民劇」の創成という理想とも合致していたという指摘も興味深い。宝塚がもともと欧米人のまなざしを意識していたことは、ブロードウェイの敏腕興行師レイ・カムストックから上演形態等について具体的な助言を仰いでいたことから傍証される。

さらに本論文は、宝塚歌劇団の訪伊の半年前にイタリアから経済使節団が訪日した際に、教育映画連盟（LUCE）が同行して製作したドキュメンタリーのニュース映画の存在（8～10分程度のフィルムが計4本）に注目し、演出を含めたその構成を緻密に分析したうえで、ここで映しだされる日本の伝統芸能などの映像が、イタリアの観客にとって、宝塚歌劇団による独自にアレンジされたカブキを受け入れるひとつの素地となっていたのではないかという、興味深い仮説を提示している。ファシズム政権が映画というメディアを様々なプロパガンダの手段として積極的に利用していたことにか

んがみるなら、この仮説には一定の説得力がある。ちなみに、ローマの宝塚公演にはムッソリーニ本人も観劇に訪れているという。

2. 従来の研究では、日独伊三国防共協定下での日本側の文化政策という背景のみに還元される傾向の強い問題を、本論文は、イタリア・ファシズムに特異な文化政策である「ドーポラヴォーロ (dopolavoro)」、つまり、労働者たちの余暇の文化活動を積極的に組織することで大衆の合意形成を図ろうとする政策との関連性のなかで新たな解釈を試みている。演劇については、「演劇振興会 (filo-drammatica)」という組織の肝いりによって、各地方都市における素人による手作りの演劇運動が推奨され実践されていたが、こうした下地が、イタリア各都市での宝塚公演がきわめて好意的に迎え入れられた要因のひとつに考えられるという指摘は、きわめて斬新なもので十分な説得力もある。このようにイタリア側の政治的・文化的条件にまで踏み込んだ議論は、これまでになされてこなかったものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年12月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降